



北信教育事務所だより

令和8年1月21日 発行 第6号

今号では、学校改革支援訪問メニュー「円滑な幼保小中接続」の取組について紹介します。

エージェンシー(※)の育成を目指した「観」の転換 ＜小布施町(町内全園・全学校)＞

※エージェンシー：自ら考え、行動し、責任をもって生活や社会を変えようとする力
(令和7年度 小布施学園一貫教育グランドデザインより)

小布施町の全学校では、「子供たち一人ひとりが、『自分のやりたい!調べたい!』にとことん取り組めるように、教職員の授業観を転換すること」と、「幼保小中の連携や地域との連携」をキーワードに、「エージェンシーの育成」を目指す学園づくりを進めています。各校の取組を、授業場面から紹介します。

＜小布施町立栗ガ丘小学校＞

12月初旬、1年生の生活科の授業は、学校の近くにある保育園の園児との交流会でした。授業者の小笠原先生は、「10月の遠足で拾ったどんぐりやまつぼっくりをおもちゃに作り変えて遊ぶ中で、『年長さんと呼んで、一緒に秋のお店屋さんごっこで遊びたい』という願いが子どもたちから出てきたんです。」と語っていただきました。交流会当日、児童は自分なりに思いや願いを込めたあそびを用意し、お店を開きました。



Aさんは、お店に来た園児に、「これは、栗を転がすコースターゲームだよ。」「それから、3回ゲームできるけど、何回やる?」と園児の様子に応じて、順序を意識しながら話したり、ゲームが成功するようにコースや障害物を調整したりする様子がありました。こうした児童が工夫する姿は、まさに生活科の思考力、判断力、表現力の基礎に位置付く「創造的に考える」姿そのものです。

＜小布施町立小布施中学校＞

牛久保先生の外国語科の授業では、「ALTの先生とその友達にまだあまり知られていない小布施の魅力を伝えよう!」と、自分なりに相手の思いや興味を踏まえながら、自分の考えを練り上げていく生徒の姿がたくさん見られました。

Bさんは、「Obuse town is beautiful because it has less trash.」とALTの先生に伝えようとしていました。なぜこの内容を選んだのか尋ねると、

「栗や美術館も有名だけど、町のきれいに目をむけてほしい。」と話してくれました。単元を通して、伝えたい内容や表現を考えたり、吟味したりする生徒の姿が多くありました。また、必要に応じて、牛久保先生がクラス全体に共通するつまずきなどを取り上げ、全体指導をする場面もありました。生徒に学びを委ねる場面と教師が教える場面の両方が、バランスよく位置付けているからこそ、主体的に学ぶ生徒の姿が生まれると考えられます。



環境を整えることで、あそびの中に、子どものどのような育ちがあるのかを見つけ、価値付けられる先生方。生徒の興味・関心を高める工夫をし、単元を通して主体的に学ぶ単元を構想する先生方。

小布施町の先生方は、子どもをよき学び手として捉える子ども観や、子どもに学びを委ね、子ども主体の学習を創造する指導観の転換を図ることで、「自分が他者、世の中、世界に対してよい影響を与える力や意志をもっている」というエージェンシーの育成や発揮を大切にした授業づくりに挑戦されています。

第2回北信地区外国人児童生徒等指導研修会

～「対話を通してAさんが自分の答えを導いていく姿を 目の当たりにしました」～



篠ノ井西小学校を会場に、公開授業やそれをもとにした演習、信州大学の徳井先生による講演などを通して、外国人児童生徒等への理解を深めました。

授業者の工藤先生の願い

中国にルーツがあり、日本で生まれ育ったAさん。日常会話は問題ないように思われるけれど、漢字の学習を苦手とし、なかなか定着しない。Aさんに合った学習を考えていきたい。



Aさんの普段の様子を「ことばの発達と習得のものさし」の枠組みから捉えてみると、Aさんは、対話、体験的な活動、視覚的な手がかりがあると理解が進み、学習活動全体を通して子どもが持つすべてのことばの力を活用して行う「斜め方向の支援」が有効だということが示唆されました。この結果を踏まえ、工藤先生は授業を構想しました。

Aさんは、工藤先生の用意した映像教材やイラストを手がかりに、場面の様子をつかみ、文を書き進めていきました。Aさんに分からない言葉があっても、工藤先生はすぐに答えを教えません。辞書を引くように促したり、Aさんとの対話を重ねたりすることで、Aさんが自分自身の経験からその言葉の意味を実感するとともに、言葉を引き出せるように関わっていました。視覚的な手がかりや工藤先生との対話を通して自分の経験と言葉の意味を関連付けることが、Aさんの漢字の苦手さを改善していくことにつながると考えられます。

「授業づくり演習」では、参加された先生方が、対話、体験的な活動、視覚的な手がかりがある「斜め方向の支援」を踏まえた授業を構想しました。

- ・実体験に結びつくように写真を用意して意欲を喚起する授業
- ・文の構成要素を、①いつ②どこで③誰が④何を⑤どうしたの視点で分解し、それをもとに自分の伝えたい状況を①～⑤の要素にあてはめながら作文し、最後は自分がニュースキャスターになったつもりで書いた文を紹介し合う授業

など

どれも短時間で構想したとは思えない、それぞれの先生方の工夫が光る授業アイデアでした。

また、徳井先生には、参加された先生方の日々の疑問や悩みに専門的な視点からお答えいただきました。



参加した先生方の感想より

- ・ Aさんが先生やお友達との対話からイメージをしていく様子が見られました。その子が持っている言葉と結びつけることの大切さを学びました。
- ・ 対話や視覚支援から言葉を引き出している先生の姿に多くを学ばせていただきました。
- ・ Aさんが安心感を持って学習している姿がとてもすばらしかったです。
- ・ 子どもが主体的に取り組める活動をたくさん教えていただきました。

「ことばの発達と習得のものさし」の枠組みから、子どもの言葉の力を多角的かつ包括的に捉え、個に応じた学習・指導計画を立てるヒントを得ることができます。個に応じた支援は、その子の資質・能力を育むことはもちろん、教室が安心した居場所となることにもつながります。

ウェルビーイング実践校TOCO-TONの取組



ぬくもりあふれる「陽だまりタイム」～延徳小学校の取組～

今回は、地域と深く連携している延徳小学校の実践を紹介します。延徳小学校には、地域のボランティアの皆さんによる「延徳っ子応援団」があり、子どもたちの健やかな成長を願って日々学校を支えてくださっています。活動は、遊びの時間の見守りや学習支援、行事への協力など多岐にわたります。



その中でも子どもたちに大人気なのが「陽だまりタイム」です。毎月第1・第3金曜日の2時休みに、約10名の応援団の皆さんが来校し、子どもたちが自由に遊べる楽しいひとときを届けてくださいます。活動内容は、お手玉や折り紙、風船遊び、ボッチャなど、子どもたちが夢中になれるものばかり。風船遊びでは、細長い風船で剣や犬を作ったり、丸い風船をバレーボールのようにして遊んだりします。折り紙では、コマや指輪、船、メダル、サンタクロースなど多彩な作品づくりに挑戦。時には子どもたちが「これを作りたい」と折り紙を持ち込み、応援団の皆さんがその思いに寄り添いながら一緒に取り組む姿も見られます。



現在、延徳小を含む中野市のウェルビーイング実践校「TOCO-TON」では、子どもたちの内から湧き出る好奇心を育む学習活動をめざし、学校改革に取り組んでいます。この「陽だまりタイム」も、子どもたちが地域の温かさに包まれながら安心して好奇心を広げられる大切な時間になっています。延徳っ子応援団の支えによって、学校は子どもたちの「好き」「楽しい」「やってみたい」を尊重し、地域とともに学び合いながら成長していく姿を体現しています。



固定された委員会を作らない、会長・副会長は置かない ～栄小・中学校の取組～

10月を過ぎると、中学校では生徒会の引継ぎに向け、生徒会選挙や新役員の選出が行われます。小学校でも1月を過ぎると、児童会の引継ぎに向けて動き出します。

栄小・中学校でも、来年度の児童会、生徒会に向けての6回の共育タイム（小中合同の話し合い）が行われ、来年度の児童会・生徒会の方向が決まってきました。

リーダーの形

・固定の児童会長や生徒会長はなし

児童会・生徒会の形

- ・必要な時に必要な委員会を作りメンバーを集める
- ・必要な活動については4月より前にチームを作る
- ・一人に対してどれくらいの仕事が良いか考える
- ・〇か月に一度話し合いをする→更新



これまで当たり前だと思っていたことは当たり前ではないということ、子どもたち自身で見出し、形にしようとしています。この流れの背景には、多くの学校行事を0から作り上げ、形にできたという子どもたちの経験からくる自信があると推察されます。また、そうした子どもたちの挑戦を真摯に受け止め、認め、支えてきた教師の強い想いが取り組みを下支えしています。

今回の児童会・生徒会のあり方に関わる話し合いを実現するために、先生方は事前に会の目的を明確にし、進め方、必要な資料を用意することで話し合いの土台を作りました。そして、来年度に向けての方向性が明確になるよう支援を行っていました。主体性の育成には、このような発達段階や環境に応じた教師の関わりが必要になってきます。今後も栄村の取組にご注目ください。

『共育』をテーマに、音楽や居場所づくりを通じた社会教育や学校教育について考え合いました

講演会

講師 清泉大学短期大学部こども学科 教授 山崎 浩 さん
演題 音楽でつなぐ絆 ～ 世代をこえて結ぶ「声」の力 ～

「うたう」ことは優しくて易しいこと。なので「うたう」ことは、世代や年代を超えて、みんなが同じ土俵に立って楽しめる素材なのです。

～講演会 山崎さんの言葉～



ご講演をされる山崎さん
音楽の素晴らしさを
教えていただきました。

講演会参加者の感想

- ◎「うた」のもつ力のすごさを感じました。「うた」は子供や高齢者をつなぐ手段になり、これからもっと社会教育の場で、活用していくことが可能だと思いました。
- ◎音楽の力を改めて感じました。心を動かすもの、人とつながるもの、思いを伝える手段、多世代交流の方法にもなると思いました。山崎先生のピアノ演奏、歌声が素敵でした。

分科会

- ①「学びの場から広げる人とのつながり
～社会教育士が取り組む地域での学び～」 舟越 暁 さん
- ②「大学生は子どもたちの居場所をどのようにつくるのか
～大学生チームの挑戦～」 長野大学 ちゅうすのみなさん
- ③「笑顔が繋ぐ多世代交流
～地域に対する愛着と誇りを育み地域活動の活性化を目指す～」 滝沢 良一 さん

分科会参加者の感想

- ①『PDCAサイクルを変えて、小さく始めてみるdCAPで始めてみた事』や『自分のライフワークとしてやっている感じ』など、ワクワクしながら、行っている感じが伝わってきて、希望を見た気がして勉強になりました。
- ②居場所づくり、素晴らしい活動だと思います。そこに通う子供や保護者に変化の機会を与えていることに感銘を受けました。ぜひ、これからも活動をつづけてほしいと思います。
- ③地域の特色を活かした多世代交流を知ることができました。社会教育委員がお互いに尊重されていることが伝わってきました。失敗を恐れず、チャレンジしないといけないですね。



居場所づくりを通じた
社会教育に関わる
ちゅうすのみなさん



学校の意向を聞きながら
地域学校協働活動を行う
実践を発表しています



講演にじっくり耳を傾ける
フォーラム参加者



自分の実践を伝えるグループ討議
自分の言葉にも自然と熱が帯びて
きます



みなさんの実践を参考にして、
自分の活動の幅を更に広げていけ
そうです

本共育フォーラムには100名を超えるみなさんにご参加いただきました。大勢のご参加ありがとうございます。参加されたみなさんが、学校と地域社会がつながる方法や両者がつながる必要性、地域社会における居場所づくりなどについて考えることができました。このフォーラムは、自分が教育に対して、どのような関わりができるのかを考えたり、それらをみんなと共有できたりする場となっています。参加されたみなさんが、このフォーラムを通して学んだことを基に、ご自分の立場で無理なくできることを探り、これまで以上に、地域ぐるみの『共育』に関わった活動をされていくことと思います。